様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月３０日現在

機関番号：３０１０５
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５２０３６０
研究課題名（和文）　コーパス分析に基づく日本語北海道方言の談話・語用論的研究

研究課題名（英文）　A corpus-based study of discourse and pragmatic phenomena in the Hokkaido dialect of Japanese

研究代表者
井筒　美津子(IZUTSU MITSUKO)
藤女子大学・文学部英語文化学科・准教授
研究者番号：００４３８３３４

研究成果の概要（和文）：本研究では、北海道各地の方言談話資料を収集し、それらを「北海道方言コーパス」として編纂・刊行した。また、「北海道方言コーパス」や他方言談話資料などに基づき、北海道方言における接続詞『そして』の方言的特性や『－らせる』と『－させる』の使役形成語尾の意味的違いについて明らかにした。さらに、日本語の文末接続詞との対照分析の観点から、オーストラリア英語などに見られる final *but* 現象の諸問題を詳らかにした。

研究成果の概要（英文）：A major task of this research project was to collect and compile a corpus of natural conversation data in the Hokkaido dialect of Japanese. An investigation of the corpus data and other databases revealed some dialectal characteristics of the meaning/function of the conjunction *sosite* and also some dialectally marked differences between the causative markers -*raseru* and -*saseru*. A comparative study of Japanese and English sentence-final conjunctions raised some analytical problems with the final *but* phenomenon notably observed in Australian and other varieties of English.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２００９年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１０年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：　言語学・談話研究
キーワード：　談話研究・北海道方言・接続表現・文末詞・コーパス・日本語

１．研究開始当初の背景

従来の北海道方言に関する研究は、主に北海道出身者がその土地に住みながら、自らが当該方言話者のことばを観察することを通して得られた方言諸特徴の記述が多かった。また、研究対象も音韻・アクセント・語彙・文法レベルに見られる方言的特異性の研究に留まっていた（石垣 1976、小野 1993、井上他 1994 など)。そのため、近年、西欧の言語学の中で目覚しい発展を遂げた談話分析や語用論の枠組みを用いた北海道方言研究は極めて少なく、談話・語用論研究に不可欠な自然会話の方言コーパスの編纂も殆ど行われていないのが現状であった。しかし、実際には『そして』を始めとする接続表現などに、談話レベルに見られる方言特有の文末用

法が存在しており、このような談話・語用論的諸特徴を捉えるには、センテンスを超えたレベルでのデータを構築し、それを考察することが不可欠であった。英語では、方言コーパスが世界各地の方言で作成され、当該地域以外の言語学者達にも幅広く利用されている。日本語の場合、この種の方言コーパスの構築は、まだ欧米ほど進んでおらず、むしろ日本のこれまでの方言研究では、研究者がフィールドワークによって言語的諸特徴を観察し、記述するといった経験的手法がとられることが多かった。近年では国立国語研究所が全国各地の方言談話資料の収録・編纂を行ってきたが、それらが『全国方言談話データベース：日本のふるさとことば集成』という形で全巻刊行がなされたのは、本研究が開始された 2008 年のことである。しかも、この方言談話データベースは主に明治生まれの話者達による「語り」が多く、現在の日本各地で最も聞かれる自然談話とは言い難い。従って、上述したような談話・語用論レベルに見られる方言的諸特徴を捉えるためには、従来行われてきた経験的観察に基づく記述のみならず、現在方言話者達が日常会話の中で実際に使用している「生きたことば」を収録し、分析することが重要であった。そこで、このような状況を改善するため、北海道方言の自然発話をデータベース化し、北海道方言における研究領域の幅をさらに談話・語用論レベルにまで広げる必要性があった。

また、これまでの北海道方言に関する研究の多くは、標準語や他方言との比較分析などに留まり、北海道方言の言語的特徴を通言語的に考察し、それを普遍的な言語現象に位置づけるという試みは極めて稀であった（例外として Sasaki and Yamazaki 2006)。しかし近年特に欧米では、「方言学(dialectology)と言語類型論(typology)は相互に補完しあうものである」(Kortmann 2003)という視座に立った数多くの研究が行われている。このような立場からの研究は、一方言に見られる問題の解明だけではなく、ある言語形式（本研究では特に接続詞）が持つ普遍的な言語機能の問題にも十分寄与し得ると考えられた。

２．研究の目的

本研究課題では、北海道方言の自然会話のコーパスを作成し、それを基に北海道方言にしばしば見られる接続詞の文末用法について通言語的な視点から調査・分析を行うものである。

本研究の主たる目的は、(1)北海道方言による自然会話のデータ収集を行い、(2)近年自然発話を分析する目的で提案された「会話分析(Conversational Analysis)」の手法を用いて、北海道方言の会話データをコーパスという形で編纂し、(3)そのコーパスを基に、北海道方言に特有な接続詞の文末用法について、通言語的な視点から調査・分析し、その談話機能の普遍性や特異性について明らかにすることである。

３．研究の方法

研究目的(1)の北海道方言データ収集に関しては、研究代表者を中心とし、研究分担者（研究協力者）や研究補助からなる研究チームを組織し、IC レコーダーを使用して北海道各地で自然会話のデータ収集を行う。データ提供者には、北海道方言コーパス作成の旨は伝えずに、自然会話録音の許可を求め、録音終了後には、個人情報の保護遵守を伝えた上で、コーパスとしてのデータ公開の同意を得る。

研究目的(2)のコーパス作成に関しては、コーパス作成ガイドラインを作り、それを基に書き起こしを行う。書き起こしは基本的に研究チームの構成員が行うが、場合によっては、下原稿作成を専門業者に依頼することもある。

研究目的(3)の北海道方言に特有な接続表現の用法に関する研究については、作成した方言コーパス内のデータ、北海道方言話者の内省によるデータ、及び日常生活において観察されたデータなどを基に考察・分析を行う。また、通言語的な比較に関しては、日本語の他方言、さらには他言語の諸方言についての研究を参照し、関連データを集め、北海道方言の接続詞に見られる諸特徴について比較・分析する。

４．研究成果

研究目的(1)と(2)の「北海道方言コーパス」に関しては、まずコーパス作成ガイドラインを策定した。近年様々なトランスクリプト法が提案されているが、本コーパス編纂にあたっては、多くの方言研究者や言語学者が利用しやすいよう、出来る限り煩瑣な記号や表記を省き、非言語情報などは視覚的に分かるよう工夫した。コーパスデータの収集に関しては、初年度・次年度にわたり、北海道各地（札幌、留寿都、釧路、黒松内、帯広、網走）の自然談話資料を収集した。そして、コーパス作成ガイドラインに基づき、書き起こし作業を行った。最終年度には、これら方言談話資料をコーパスとしてまとめ、「北海道方言コーパス」(8談話、約7時間20分）を編纂した。

研究目的 (3) に関しては、接続表現の研究を通して、他言語で観察されている言語現象を北海道方言などの日本語諸方言との比較・対照を通して考察することにより、また逆に日本語諸方言を通言語的な視野から研究することにより、「方言研究」と「言語類型論」の互恵性を詳らかにした。

初年度の文献調査の結果、近年俄かに英語を始めとする西洋の諸言語において、接続詞の文末用法（英語ではfinal *but* 現象）が注目されていることが判明した。ただ、これらの現象には事実の誤認もあり、日本語の視点、特に北海道方言を始め日本語諸方言の視点から、当該分野へ新たな貢献が可能であるということが明らかになった。

そこで、初年度は、接続詞の文末用法が見られる広島方言の調査を行った。広島方言では、接続詞『ほいで（ほいて)』の文末用法が同様の用法を持つ北海道方言の『そして』よりもさらに慣習化され、文末詞としての文法化が進んでいる。広島方言調査は、この文末詞化した接続詞の談話的意味・機能についての調査を主たる目的とした。広島方言研究者及び広島方言話者から、文末の『ほいで（ほいて)』の談話・語用論的意味機能として、「驚き」、「喜び」、「苛立ち」といった情緒的な内容を強意的に使用する際に用いられるといった有益な方言話者としての内省的判断を得ることが出来た。

また、次年度には、final *but*現象が最も報告されているオーストラリアへの調査旅行を行った。「第11回国際語用論学会」に参加し、最新の談話・語用論に関する成果を学ぶと共に、当該現象に関する文献収集や現地調査を行った。その中で、オーストラリア英語の文末の*but*にもやはり強意的・情緒的な意味機能があることが明らかになった。

同時に、北海道方言に見られる接続詞『そして』の文末用法に関する研究も進め、作成中の「北海道方言コーパス」及び国立国語研究所発行の『全国方言談話データベース：日本のふるさとことば集成』に基づき、接続詞『そして』の北海道方言的特性について、「社会言語科学会第25回大会」（平成22年3月14日、於 慶応大学日吉キャンパス）にて、口頭発表を行った。その中で、北海道方言の『そして』には「話し言葉傾向」、「汎用化傾向」、「文末詞化傾向」が見られることを明らかにした。また、接続詞の文末詞化傾向は、北海道方言の『そして』以外に、広島方言の『ほいで（ほいて)』や大阪方言の『しかし』にも同様の文末詞化傾向が見られることを示した。

初年度の広島方言調査、次年度のオーストラリア英語調査、そして北海道方言に見られる接続詞『そして』の研究を基に、最終年度は、日本語の文末接続詞との対照分析を通して、オーストラリア英語などに見られるFinal *but*現象の諸問題を明らかにし、その成果を５月にフランスで行われたInternational Conference on Final Particles（平成22年5月28日、於 フランス・ルアン大学）で発表した。Final *but*現象に関する従来の研究では、文末に存在する二つのタイプの*but*が文法化の過程として一つの連続体を成すとされていた。本発表では、統語的・音韻的・談話機能的観点から見ても、これらは連続体を成さず、それぞれ異なる過程を経て生成されるものであるということを主張した。

また、自然談話に基づく北海道方言研究から得られた副次的成果として、北海道方言における『-らせる』と『-させる』という使役形成語尾には、「許可」と「強制」という意味的違いがあるということを明らかにした。この成果は「社会言語科学会第27回大会（3月19日、於 桜美林大学）で発表予定であった。東日本大震災の影響で、学会は中止となったが、その成果については、発表論文集に掲載された。

三年間の研究計画に従って行われた研究成果は、科学研究補助金報告書『コーパス分析に基づく北海道方言の談話語用論的研究』としてまとめ、刊行した。報告書には、研究目的(1)と(2)に従って作成された「北海道方言コーパス」を収録した。また、併せて本研究課題で行われた一連の研究や国内外の方言研究の成果をまとめた二編の論文を掲載した。本報告書、並びに「北海道方言コーパス」のデータベースは、方言研究者などの多くの言語研究者に利用可能である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①井筒美津子、井筒勝信、「おかしいしょ、そして」：北海道の話し言葉で用いられる『そして』の意味・機能的方言特性、社会言語科学会第 25 回大会論文集、査読有、78～81

②井筒勝信、井筒美津子、「させてんでないの，やらせてんの」：北海道方言に見られる二つの使役形、社会言語科学会第 27 回大会論文集、査読有、70～73

〔学会発表〕（計３件）

①井筒美津子、井筒勝信、「おかしいしょ、そして」：北海道の話し言葉で用いられる『そして』の意味・機能的方言特性、社会言語科学会第 25 回大会（慶応大学、神奈川県、2010 年 3 月 14 日）

② 井筒美津子、井筒勝信、Hanging or backshifting? The rise of final particle *but* and their comparables in Japanese、International Conference on Final Particles (FiPa 2010)（ルアン大学、フランス、2010 年 5 月 28 日）

③井筒勝信、井筒美津子、「させてんでないの，やらせてんの」：北海道方言に見られる

二つの使役形、社会言語科学会第27回大会（桜美林大学、東京都、2011年3月19日発表予定、震災により中止）

〔図書〕（計１件）
①井筒美津子（編）、藤女子大学、『コーパス分析に基づく北海道方言の談話語用論的研究』2011、324

６．研究組織
(1)研究代表者
井筒　美津子（IZUTSU　MITSUKO）
藤女子大学・文学部英語文化学科・准教授
研究者番号：００４３８３３４

(2)研究協力者
井筒　勝信（IZUTSU　KATSUNOBU）